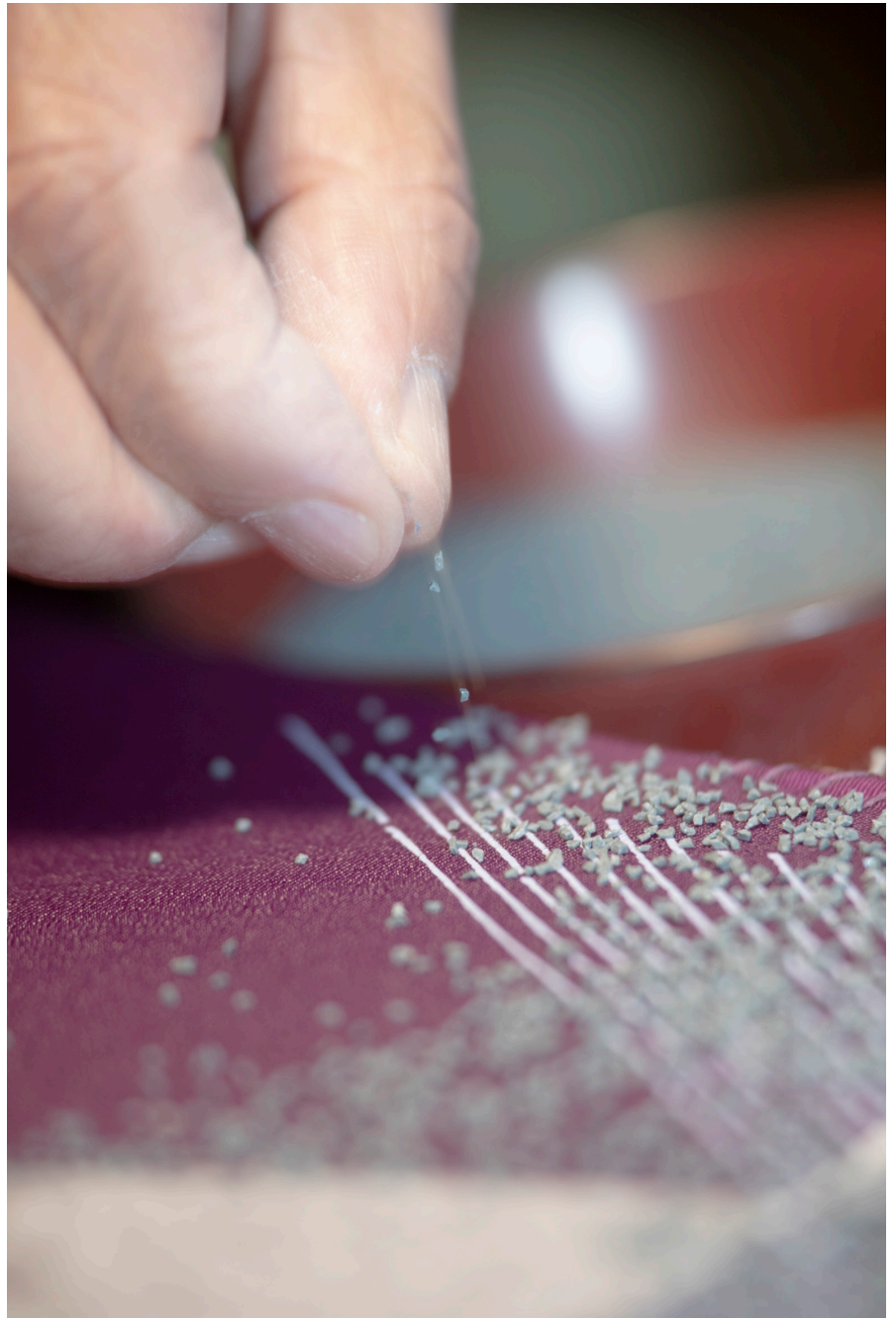




**HOMO FABER**  
Crafting a more human future



press release

**HOMO FABER 2022**

**Special column vol. 02**

**森口 邦彦** Kunihiko Moriguchi

重要無形文化財「友禪」保持者(人間国宝)

## 時代を切り開くバイカルチュラルな視線。

日本の伝統工芸には古典的な模様や絵柄を用いた様式美がつきものだ。しかし、森口邦彦が手がける友禪には、ステレオタイプな工芸表現とは異なる、現代性に満ちたダイナミックな世界が広がっている。京都の染織家で人間国宝の森口華弘（もちぐちかこう 1909～2008）を父に持つ森口邦彦は、いかに伝統的な友禪の技を独自の創作へと導いていったのか。その原点は彼の学生時代にまで遡る。「大学で私は日本画を専攻していたのですが、当時の日本の美術界は『具体』や『走泥社』といった前衛芸術が席卷する刺激的な時代でした。アメリカン・ポップカルチャーの影響もあり、何ものにも束縛されない自由な感覚を求める気風が充満するなか、私も前衛的な活動に参加してみたものの、どこか心が満たされずにいました」

そんな森口が新天地として目指したのが、フランスだった。日本の伝統美術とは一旦距離を置き、デザインを専攻。さまざまな芸術家と交流を重ねるうちに、単に時流に乗って面白おかしく表現するだけでは本質に到達できないこと。根底にあるものを丁寧に拾い上げてこそ次なる思想や表現が生まれるのだと理解するに至る。なかでも画家・バルチュスとの親交は、森口に大きな変革をもたらした。「実力を認められたこともあり、パリでグラフィックデザイナーとして働くことを考えていたのですが、ある日バルチュスに『帰る場所がある者は、そこに戻るべきだ』と言われ、心が大きく揺らいだんです」

子供時代に染織家の父のそばで友禪と触れ合ってきたこと、日本の工芸が単なる伝統の

継承ではなく、時代背景や作り手に応じて、さまざまな変革を繰り返して現代に至ることなど、森口を取り巻く環境を的確にバルチュスは見抜いていたのだ。

彼の助言を胸に日本に戻り、改めて友禪と真剣に向き合うことを決意した森口だったが、人間国宝の父、森口華弘と同じ空間で仕事をすると、あまりにも素早く正確な筆運びや、オリジナリティ溢れる美しい図案といった父の超絶技巧に圧倒されてしまい、一生かけても追いつくことはできないのではないかと不安感に駆られる。

「父に従って泊まりがけで東京の着物問屋さんの元を訪れたときのこと。旅館で隣に床を敷いていた父に、『僕は絶対にあなたのような作家になることはできない』と、思わず愚痴ってしまったのです。すると父は『うちはそんなに代々続く家系ではなく、私も一代目なら、あなたも一代目。もう一度きちんと師匠の仕事を見てみなさい』と言われたのです」

父の言葉を反芻しながら京都に戻り、工房に置いてあった父の師匠、中川華邨（なかがわかそん 1882～1967）の作品集を広げてみた。すると、同じモチーフを扱いながらも、父と師匠の表現は驚くほど違うことに気づく。

「様式を受け継ぐのでも風潮を反映するでもなく、独自の時代を作り上げることが友禪の世界。そう確信できたとき、ようやく自分が進むべき創作の道が見えてきたのです」

森口邦彦の友禪は、グラフィカルな幾何学模様の裏に、不思議な奥行きと立体感、いまにも動き出しそうな躍動感が宿る。これは衣桁に掛けて飾るときも、着ているときもともに美しく見えるようにと構成した図案に加え、20



©Kunihiko Moriguchi

とも30とも言われる複数の手仕事を重ねる友禪の繊細な技の賜物だ。

伝統技法はそのままに、地と柄の空間の関係を考えながら、多様に組み合わせを変化させていく。現代と古典、西洋と東洋、工芸とデザイン。相対する両義性を一つに捉えるバイカルチュラルな視点を持っているからこそ、森口邦彦の友禪は唯一無二の存在となる。

「友禪を軸とする着物も、貴族から庶民まで、幅広い人々に愛され、革新を繰り返してきました。伝統工芸は古典的だと言われがちですが、僕はそんな感覚に捉われたくはありません。もっと伸び伸びとした宇宙の広がりがある先にあると信じているんです」



森口 邦彦/もりぐち くにひこ

1931年京都府生まれ。59年京都市立美術大学日本画科入学。63年フランス政府給費留学生として渡仏し、パリのフランス国立高等装飾美術学校を卒業。66年帰国、友禪に従事する。1988年フランス政府レジオンドヌール芸術文芸シュヴァリエ章受章。2007年重要無形文化財「友禪」保持者（人間国宝）に認定。2020年文化功労者顕彰を受ける。